西来寺蔵　義源撰『法華読音』解題と翻刻

柴　佳世乃

三重県津市の西来寺（天台真盛宗）に所蔵される『法華読音』を翻刻紹介し、併せて簡略な解説を施す。

解　題

本書は、鎌倉後期の天台学僧、成乗坊義源が、自らが伝授された『法華経』の字音について記したものである。奥書によれば、乾元二年（一三〇三）三月二十三日から二十五日にかけて、善峯寺において仏神聖人より伝授されたものという。書中、「乾元二ー三ー廿三ー」（八オ）「同廿三日夜」（一一ウ）「已上廿四日」（二一オ）「已上廿四夜」（二二ウ）「已上廿五日」（三〇オ）などとあるから、実際に日にちを追って個々の字音を伝授されたのであろう。『法華経』八巻二十八品の、序品からはじまって勧発品まで順を追って、経の文字が掲出され、声点や入声表記、あるいは注意書が記されている。また、末尾には、「法花読誦相承」として梶井流・恵心流の血脈が記載され、両流に義源が連なることが示されている。これが日にちを明確に、実際に行われた相伝であるこ

と、檀那流（梶井流は檀那流に属する）・恵心流の天台教学二流において法華経読誦の口伝が存在し、このような形で一書にまとめられていること、そして教学における重要人物義源がそれに関わっていること、等の点において看過できない資料といえよう。本書については、『法華経』の字音研究の立場から、はやく兜木正亨氏が言及され、梗概も記されているが[1]、全体の紹介は未だなされていない。

本書を所蔵される西来寺は、近世末の学僧宗淵[2]（一七八六―一八五九）が住した寺である。宗淵は、山家本『法華経』を開版するにあたって、『法華経』およびその字音に関する書を博覧した。『法華経考異』下巻末尾に「妙経字音書目」としてそれらの書名が挙げられ、解説が施されているが、そのなかに、

法華読音〈叡山ノ成乗坊義源法印ノ撰。其尾ニ載ス二法華読誦之相承ヲ一。先挙テ二梶井ノ流ヲ一云、慈覚大師、承雲和尚、尊意贈僧正、安愿内供、尋叡内供、明快大僧正、良真大僧正、最雲法親王、仁豪僧正、明雲大僧正、顕真権僧正、仁全法印、承弁法眼、源全法印、義源ト。次ニ挙テ二恵心流ヲ一云、恵心ノ先徳、覚超、勝範、長豪、忠尋、寛勝、仁真、行忍上人、阿観上人、義源ト。右ノ両流ハ一同、但有二口決一。更ニ問ヘ。乾元三年三月伝受ト云云。淵、写二得ス二本ヲ一。一本ハ者、葛河ノ明王堂ノ蔵、一ハ者、東山ノ若王子ノ蔵也。（後略）〉

（〈　〉は割注、句読点は私意。引用に際し、音訓符は省略した。[3]）

とある。これが本書に他ならない。宗淵は、義源の音を批判的に取捨し[4]、『法華経』研究を成しているが、その著作の中に「源音」（＝義源『法華読音』の音）への言及は多い。宗淵が、参照すべきものとして本書を取り上げていたことがうかがわれよう。

ところで、本書に関連するものに、随心院蔵『妙法華経音義』、ならびに京都大学文学部蔵『法華廿八品字読クセ』がある（以下、適宜「随心院本」「京大本」と略称）。

随心院本については、京大本との対照をも含めて、山本秀人氏に詳細な解説があるので[5]、それを参照しつつ、『法華読音』との関係を述べたい。随心院蔵『妙法華経音義』の構成は、左の通りである（山本氏による）。

①法華経読誦の作法（序文に相当）
②音義本体
③「法華経読音句」
④「又様」
⑤「法華読誦相承次第」
⑥「旦」「大」等人名略称の説明
⑦「半音」「中音」等の解説

同様に、京大蔵『読クセ』の構成は、

②「読クセ」本体（……随心院本の音義本体に相当）
③「法華経読音句」
④「又様」
⑥「旦」「大」等人名略称の説明
⑦「面授口決」

⑤「法華読誦相承次第」

△「法華経陀羅尼」（……随心院本には無い）

である（丸数字は、随心院本に対応。いずれも山本氏解説より適宜引用）。随心院本によって示せば、内容は大きく①②と、③～⑦とに分けられる。『法華読音』を右に対比してみると、その内容は、①②そのものに相当するのである（しかしながら、『法華読音』に見られる「已上廿四日」等の伝授の日付の記載は無い）。ここで重要なのは、右書の相承次第と相伝者である。随心院本末尾には、「応安三年（一三七〇）庚戌七月六日　法印権大僧都叡記」とあり、「叡」とは血脈より「叡憲」なる人物であることがわかる。梶井流血脈には、義源から叡憲に至る線が示されており、かつ、文中「私云叡ー、対成師一部首尾奉受分及七八个度」の謂いがあるので（「成師」とは、成乗坊義源のこと）、義源から叡憲に相伝されたものと推定される。

結論から言えば、『法華読音』は、義源が、乾元二年に相伝された『法華経』字音の内容を著したものであり、随心院蔵『妙法華経音義』および京大蔵『読クセ』は、『法華読音』を含めて義源から弟子叡憲に伝授された口伝を、叡憲が記したものであると考えられる。『読音』に見られる伝授の日付が後二者に無いのも、相伝にあたって省略されたのであろう。随心院本・京大本は、相互に声点表記が相違している箇所が若干見られるが、『法華読音』との対比においても同様に、相違箇所が存する。書写段階における差声の誤りなども考慮すべきであろうが、検討の余地を残す。ちなみに、『法華読音』冒頭の、読誦の際に唱える頌は、随心院本にのみ見られる（前掲構成①）。おそらく『法華読音』撰述時より付されていたものであろう。なお、随心院本および京大本の③以下には、読経道（芸道としての読経）にまつわる伝承などが見られ[6]、これが義源から叡憲に伝えられたものであ

るとすれば、教学の人脈の中にこうした読経伝承が広まっていたことをうかがわせて興味深いが、ここでは立ち入らないでおく。

さて、義源について、血脈を中心にいささか触れておく。義源は、天台教学においては梶井流に属し、さまざまな口伝類を記録して学問の中心を担った「記家」のひとりである。梶井流の血脈『師資相承血脈譜次第』[7]に、義源の名が見える。

付嘱梨本門跡　梶井正流

道邃和尚、伝教大師、慈覚大師、承雲和尚、尊意贈僧正、安愿内供、尋叡内供、明快大僧正、良真大僧正、仁豪僧正、最雲親王、明雲大僧正、顕真権僧正、〈此時当流二分。一分仁快大僧都、今大祖師也。分布延暦寺執当仁全法師。〉仁快大僧都、承快法印、雲快僧正、顕雲僧正、顕意僧都、雲雅僧正〈已上大塔門流〉、仁全法印〈梶井流祖師〉、承弁法眼〈同執当〉、源全法印〈同〉、弁全法眼、義源〈已上梶井流〉、光宗、慈顕

（傍線引用者）

慈覚より顕真、仁全より源全、そして義源へという、『法華読音』の梶井流血脈は、若干の順序の逆や省略はあるが、右にほぼ等しい。義源は、山王神道の書『山家要略記』の成立に深く関与したことで知られ、『渓嵐拾葉集』の編者光宗の師であった。また檀那流のみならず、恵心流、台密穴太流等々諸流に通じ、中世の天台教学の興隆におおきく寄与した人物である。義源の足跡は野本覚成氏によってまとめられているが[8]、それに参照すれば、『法華読音』を伝授され著したのは、記家としての活動が本格化する前のこととなる。円頓戒の再興を成した興円と関わるのも、この後である。義源をめぐる人脈については後考に委ねたいが、義源の広汎な学のなか

に、『法華経』の字音学が確かに存在していたことは留意すべきであろう。

本書『法華読音』は、主として字音研究の立場から取り上げられることはあったが、教学や中世文化の側からはほとんど言及されてこなかった。これが義源の撰述であり、恵檀の教学においても字音の口伝伝授がなされていたことが浮かび上がって大変興味深い。南北朝期に至ると、記家にも通ずる心空が、字音に関する書物を次々と著していくことも思い併される。本書は、教学と読経道[9]の連関を考える際に、様々な示唆を与えてくれるはずである。

注

(1) 兜木正亨『法華版経の研究』(大東出版社、一九八二年)。数箇所にわたって言及があるが、特に「法華経開版史上における宗淵上人の業績」に内容の梗概について記載がある。

(2) 宗淵については、『天台学僧宗淵の研究』(真阿宗淵上人鑽仰会編、一九五八年)に詳しい。

(3) 国会図書館蔵本による。

(4) 注1前掲書に論じられる。

(5) 『随心院聖教類の研究』(汲古書院、一九九五年)所収「随心院経蔵重要典籍　影印・翻刻・解説」のうち、「妙法華経音義　一帖」(山本秀人解説)。

(6) 『読経口伝明鏡集』との関連で、前掲山本秀人氏が言及。また京大『読クセ』に触れて清水眞澄「能読と能説―音芸「読経」の領域と展開―」(『梁塵』一四号、一九九七年一二月)にも言及がある。

(7) 硲慈弘『日本仏教の開展とその基調(下)』「中世比叡山における記家と一実神道の発展」(三省堂出版、一九五三年)所収。

（8）野本覚成「成乗坊義源の行跡―鎌倉末比叡山の学匠―」（『天台学報』二七号、一九八五年一一月）。
（9）読経道については、拙著『読経道の研究』（風間書房、二〇〇四年三月）を参照されたい。

謝辞　西来寺には、一九九七年春の最初の閲覧より一貫して、便宜をはかっていただいた。貴重な資料の閲覧と紹介をお許し下さった西来寺に、あつく御礼申し上げる。

書誌

仮綴装一冊。法量、縦十四・二糎、横十五・一糎。料紙楮紙。墨付三十二丁。
外題「法華讀音」（左肩打付書）。内表紙外題「乾元中義源撰／法華讀音」（中央打付書）。
表紙右肩に「舌」の文字有り（墨）。またその下に「往」の文字有り（朱）。「西来寺蔵」の朱角印有り（表紙中央）。近世後期書写。

＊なお、『国書総目録』によれば、「法華読音　梶井流恵心流」なる明徳院無動寺蔵本が知られるが、叡山文庫には見出せず、未見。叡憲の著というから、おそらく義源から叡憲に相伝されたもので、解題で述べた随心院本・京大本と同系統のものと推測される。

翻刻は、次のような方針で行った。

一、漢字は通行の字体を用い、割り注は〈　〉で括った。
一、行取りは底本に従った。
一、半丁毎に　』を付し、行頭に丁数を示した。
一、声点は、底本通りの場所に付した。
一、末尾の相承血脈に、一部朱書きになっている部分があり、〔　〕で括って示した（原本の破損箇所を、他本によって忠実に補ったものと推定される）。

翻　刻

乾元中義源撰
法華読音　　』（内表紙）
無上甚深微妙典
百千万劫難遭遇
我今見聞得受持
願解如来真実義
　　已上唐本端有此頌
1オ　奉読之時先可唱之　　』
1ウ（半丁白紙）　　』

妙法蓮花経序品第一

王舎城　耆闍崛山中

逮得巳利　阿若憍陳如

伽耶　大目犍連　畢陵

薄狗　衆所知識　眷属俱

2オ菩薩　殖衆徳　仏恵〈非ヱ非テ　中音ナルヘシ〉』

能度〈ノウ　ヨク　タイハ義叶ヘリ　タイ　タヘタリ　然而常ニハノウ〉

勇施　釈提桓因　乾闥〈山門〉

乾ー〈法相　三井同〉　楽〈カク山門　ケウ法相〉

楽音乾　美音乾

婆知阿修門　婆〈ニコルヘキ歟　然而スミタルハ尋常也〉

2ウ佉羅騫駄　囲遶　大乗　』

是時天雨　尓時仏放

眉間百毫　万八千世界

行菩薩道　般涅槃者

今者　当以問誰　誰能答者

必応〈中音　ヲウニモトウニモ非ル音也〉　我今当問

3オ照于〈ウノ字ツキアケテ可読之〉　欲重宜此　』

悦可衆心〈去声ニ可読歟然而平声ニヨミタルキヽヤスキ歟〉

因縁〈ネントサハヽトヨムヘシ　音通ノ字也〉　皆如金色

演説経典　出柔耎音

梵音深妙　若人遭苦

及千億事　金剛諸珎

3ウ諸仏所難　巨妾　』

楽誦経典　深山

深修禅定　安禅〈去ハ安義　平ハ息義〉

宴默　済地獄苦〈獄苦ノ二字　ヒキノケテヨムヘシ〉

増上慢人　捶打〈去声コト〳〵シ　平声宜シ〉

及癡眷属　施仏及僧

4オ教詔〈下モ去声ニ読ヘケレトモ平声ニヨムナリ〉　』

香花　殊特　一光

放一浄光　欣仰

及見諸仏　当知　正遍知
深遠〈ノウハ音通スル也〉　純一
説応〈中音〉　有八王子
4ウ七名〈下ニテハ七チト上ニテハ七ツト読也〉　』
如来於今日中夜　阿伽度
利養〈仮名ヲハイヤウト付ヘキナリ　然而略イヲ一ヤウト付ルナリ〉
八王子　諸天龍鬼神
及見諸天人　如金山
如恒沙　適従〈チヤクハ僻読也　然而サヨミツケタリ　シヤクトヨムヘキ也　チヤクハタマ〳〵シヤクハハ
5オシメ又マサニト云義也〉　』
何因縁　光歓喜
悉皆能　於中夜
一遇　一何速　安慰
勿憂　加精進　法花〈クヱト人ノ
耳ニ聞ユルヤウニヨムヘシ〉　諸仏已　廃忘
5ウ一心待　』
方便品

仏曽親近　五従成仏
言教　深遠　言之
仏所成就　及世人　不堪
善説法　如稲麻

6オ告諸耳耳　仏以（中音）

引之令得出　有所言説
未曽従仏　久乃
亦無能問　諸天龍
所行道　瞻仰待

諸増上慢者　唯垂　枝葉（エフ）

6ウ佳矣　鉢華　時一（チ）

唯以一（ッ）大事　一仏乗　出於（中音）

有懐増上慢　我慢　仏威（ッチ）
以諸縁　一（チ）偈一（ッ）乗　不可
亦無貪　立誓願　今者
三悪道（ナク）　虚安法（ッ）　諸法相

7オ善（マク）奚心　槫瓦　綵画（エ）

角角唄　箜篌　仏徳
塔廟中　南無仏　其実為一乗
説一乗　如第一　及諸根利鈍
安穏　入生死　如犛牛
亦経行　七日中　我聞聖師子
7ウ不可以言宣　差別名　」
従久遠劫来　為説仏恵故
於諸菩薩中　説無分別法
悉亦当作仏　懸遠
出于世　乃一出
発一言　心生大歓喜
8オ巻第一　乾元二丨三丨廿三丨　」
8ウ（半丁白紙）　」
第二　譬喩品
感傷　失於　必以大乗
而今従仏　聞所未聞

従仏口生　仏音（中音）　於山谷
一法中　十（フ）八不共　我獨（ッ）経
9オ巧言説　深遠　永已（ヰヤウ）　『
為天人　於天人　所行道（ツラナル義也）
七宝行樹　若欲行時
善知　無瑕穢　悉（ノ）具足
人民衆　雨衆天花　若（ッ）過世
及（ッ）見仏　亦各自以離我見
9ウ若（ッ）国邑　僮僕　一門　『
多諸人衆　棟　焚焼
従四面起　我身手有力〈手有ヒキノケテヨムヘシ〉
几案　従舎　狭（ッ）小　恋着
視父而已（シ）〈スミニコル〉　情必　難得
門外　駕以　我有〈ヒキノケテヨメ〉
10オ不（ッ）也世尊　況復　『
而抜済之　懈倦

為生老　保任　勤修精進
誘(ユ)進　獨(リョ)得　其宅(タク)
椽梠差脱　烏鵲(ッ)　虫輩
其舎恐怖〈舎恐ヒキノケテヨムヘシ〉
10ウ既飽(ハウ)　蹲踞　一尺〈チヤク　シヤク〉　」
悪獣(シュ)　崩倒　蔵竄(サム)
周章　妧湎　門外
貧楽(ラク)　張施(シ)　細氈
雖復教詔　今所応作
真実(ッ)無異　名第三諦
11オ聞者　更正　梨黐(リタン)　」
水草　唼(セフ)食　抄劫
如恒河沙　園観　山澤
求経　同廿三日夜
信解品
居僧　涅槃證　逃逝

11ウ 他国　本国　皆盆
買客　還到　余年
庫盆　子息　一旦
憂慮　展転（テン）（チン）　承足
覆以　散衆　出内（スイ）（ヌイ）
特尊　急追（ッ）　愕（カク）
12オ 大喚　見捉　執（フ）之
以冷水灑面　審知　除糞
具陳　糞土　塵分土
盆器　麺　心相
当体　宣言　怪惜
今法王大宝　音教　頓止
12ウ 愛念　死時（シャ）　瘡　券
覆（フク）目　借問　皆便令知
門外　周行　恣其

報仏之恩　子等　法中
報者　両肩　尽心（コトゝク）（ツクス）
又知成熟
13オ　巻第二　」
13ウ（半丁白紙）」
第三　薬草喩品第五
所行　世界（タイ）　遍覆（フ）
善処　所能（フタウ）　蒲萄
枝葉　普覆　出于（中音）
枯槁　及者（ッ）　及得（ッ）
14オ尊処　一滴　所行　」
授記品
而於来世　足尊　散衆
称計　敢食　沙礫（リヤク）
楼閣　当供　最後身
見者　称数　於当来世

14ウ勝者　長表　意楽国
如恒河沙　当説
化城喩品
不也　垂　常撃
身体　減損　咸稽
此是何因縁　万億国土

15オ及見　千市　散花
納処　迦陵　滅少
雨充満　遠音　転滅
及智恵　及楽想　邪見法
劫習法　三転　行法輪
静室　入室　昇

15ウ安祥　所行　及声
険難　衆人　懈退
疲倦　語衆人言
知諸生死　息故
諸天神龍　及世人

覚悟（カクサトル）　及四維　甚難値

16オ甘露（ケウサム）　応当知　如恒沙

助法化　逈絶　獣

水草　重門高楼（ロウ）閣

入此城　懈廃　尓乃

16ウ

第四　五百品

奇特　歎其　於賢劫中

台観　宮殿　交接（セウ）

両得　欲懈怠　不亦快

楼閣　為宣説　諸神通

17オ他国　乏短　我久（引）

諸餚饌　甚艱難　常愍

及転次

人記品

不亦快　既満　名常立

新発意（中音）　於空王　面於仏

17ウ太子時　為法子　」
是二千声聞　後当成正覚

諸神通
法師品

如来使　天花香　及天宝
衆甘美　及種々　説経典

18オ猶多怨　況滅　衣覆之　」
渇乏　施切　余国
異国　難得　於高原
深経　是諸経　加刀杖

宝塔品

而荘挍之　龕室

18ウ今応当集　衆菩薩言　」
諸宝　満掬　見所
開　及見　及第

如清涼　足指　遠擲他国
19オ為一人説　」

第五　提婆品

及天人　不惜躯　於法故

宣令　大法故　時王聞

八十種好　磨金色

時天王　信敬　諸群生

19ウ年始　我雅　時龍王　』

当時　六変

勧持品

為慮　上慢　雖難

広宣　利養　但惜

安楽行品

20オ難有　及畜　況　』

鮟捕　屠兒魁膾

嬾惰　亦尓　安楽供

恚慢　常柔和能忍

故行道　瑆中明　賞賜

見身処中　七日

20ウ湧出品

単已　足尊　巨身

其因縁　之因縁　皆従中

於三千　心生　太子時

不遠　生育　如蓮花

面皺

21オ　已上廿四日

第六　寿量品

非心力　限数　年紀

良医　子息　遠至

宛転　経方　梼筵

所中　求索救療

21ウ死時　差　他国

背喪　不也　心恋慕

諸堂閣　我智力如是

為凡夫
分別功徳品
立精舎　若経行　万億劫
22オ中之王　解其言趣　及造　『
声聞衆僧　若経行処
而荘厳　甚高広　常照明
衆住処　謙下（ヘリクタル）諸比丘
已上廿四夜

随喜功徳品
若長　若幼　巻陌
22ウ宗親〈ソウハ　シタシ　タトシ〉至第五十　『
其第五十　卵生　楼閣
皺　所得功徳　不如是　第五十人
如是第五十　於会中聞
天宮　人言　有経名
間聞　共生　万世
23オ不黄　不差　縮（シク）　『

脇キム　悪　膚脇
狭長　高直　円満
我今応当教　咸応当
舌不乾　須臾聞歓喜
勧人

23ウ法師功徳品

皆令清浄　所畏心
余山　愁嘆　言之
琴瑟箜篌声　之音声
嶮谷　其音声　相呼
諸音声　多伽羅　丸

24オ如是等天香和合所出之香

諸天身香　勝殿　若香
及知　諸宮人　宝女
厳身　香気　野牛水牛
伏蔵　花荘厳　若経行

法生鼻　若好　方面
24ウ死時　諸群　俗間　」
語言
25オ　」
第七　不経（ママ）品
威音王仏寿四十　名常不軽
深敬　多年　猶高声唱言
五百比丘尼思仏〈未定然而可如此歟〉
及見　当深心　随喜
25ウ神力品　」
虚空中声已　南無ー　南無ー
衣舎　山谷曠野
属累品
難得　有慮　諸分身
薬王品
26オ宿王　及此　海此岸　」

畢力迦（ヒリョウカ）〈梵語也〉　沈水膠香（ケイ）〈物名也〉
灌諸香　及海此岸（フ）　甄迦羅（カ）
我今当還供養此仏白已
上昇　容顔（ケン・カン）〈二読供不苦云々〉
及給侍（ッフ）　若干千塔　発阿（タ）
26ウ両臂　還復　土山黒山　」
川流　如清涼　如商人
客（カク）　炬　悉敵（チヤク）
妙音品
我当往　及見（ッ）　莫（マク）軽
我今詣　亦欲（ッ）　照曜
27オ而来詣　其三昧名現　」
第八　普門品第廿五
観其　大水　漂随羅刹
国土満中〈着上着下両義〉　勿得（ク）恐怖
衆商人　倶発（ホッ）声言

即解頸衆宝珠瓔珞

27ウ観音行　善応　千億　』

及見身　観音力　爪

降雹　真観清浄観

智恵観　悲観及慈観

須常念　普門品時〈品字着上着下両義〉

陀羅尼品

28オ咩〈羊鳴〉〈非及ニハ鳴ノ音ナリ。メイト読付タリ〉』

短便タヨリ　黒歯シ

勒伽キヤ　如殺シ　厭エウ油

消衆

厳王品

長荘厳　指爪掌

28ウ是誰誰之　亦欲ク　』

空中下　甚難値　復難是

脱諸難亦難　値浮木

歓悦　殊特　付第

長広　紺青　教誡
快善　及諸眷属故

29オ於彼中生　」

勧発品

二十八〈チト読ヘシ、サレトモ八ットヨム也〉

不可称数　七迦　三者

伺求　其便者　得便
現身　安慰　七日

29ウ見身　中生　所覆　」

猟師　我慢邪慢増上慢
膿血　水腹

巻第八

30オ　已上廿五日　」

乾元二年三月廿三四五日於善峯寺
奉随仏神聖人奉受畢
比叡山大乗受業沙門義源

30ウ　」

法花読誦相承　　梶井流
慈覚大師　承雲和尚
尊意贈僧正　安愿内供
尋叡内供　明快大僧正
良眞大僧正　最雲法親王
31オ仁豪僧正　明運大僧正　』
〔顕眞権僧正　仁全法印〕
承弁法眼　源全法印
義源
恵心流相伝
恵心　覚超
31ウ勝範（蓮実坊）　長豪（中嶋院主）　』
忠尋　寛勝（桂林坊僧都）
仁眞（功徳院法橋）　行忍上人
阿観上人（安楽谷）「妙観上人霊山院」

西来寺蔵　義源撰『法華読音』解題と翻刻

義源　「義源

32オ　〔右両流一同但口決更問〕　』

付記　本稿は、平成十五年度科学研究費補助金（若手研究(B)）による研究成果の一部である。